

『韓国語教育研究』（第7号）別刷

ISSN 2186-2044

【研究論文】

韓国語教育におけるインポライトネスの教授法  
—社会的・文化的価値体系及び言語的側面からの提案—

河 正一

日本韓国語教育学会

2017年9月

# 韓国語教育におけるインポライトネスの教授法 —社会的・文化的価値体系及び言語的側面からの提案—

河 正一

本稿では、社会的・文化的価値体系と言語的側面におけるフェイス侵害行為、これら二つの側面を統合したインポライトネスの教授法を試みた。韓国の伝統的な社会的・文化的価値体系は、集団主義と権威主義に支持される。個人の個性より集団との調和が求められる集団主義では、個人を目立たせる言語行動はインポライトネスにつながりやすい。また、垂直的序列を重視する権威主義では、社会的力関係の上位者（年配者、地位など）への尊重がインポライトネスのカギとなる。また、言語的側面の教授項目として、①語彙②文法・句型③敬語④談話レベルに分け、価値体系と関連したインポライトネスの教授法を論じた。異文化理解では、言語や文化の多様性と相対性を認識し、多元的かつ相対的な物の見方が求められる。ゆえに、授業では、「言語行動におけるポライトネス及びインポライトネスとは何か」と共に、「社会的・文化的価値体系におけるポライトネス及びインポライトネスはどのように違うか」というテーマを取り上げ、異文化理解を深めていくべきである。

## 1. はじめに

これまでの言語教育では、異文化理解の教育方法としてポライトネス (politeness) 理論が多く取り入れられてきた。一方、インポライトネス (impoliteness)<sup>1</sup>はポライトネスの周縁的な言語行動として、すなわちポライトな言語行動に反する一例としての位置付けが多かった (河 2014 : 94)。おそらくインポライトネスは、ポライトネスとは異なって、望ましくない、避けなければならない否定的な対象としての認識が強かったかもしれない。しかし、相互行為における言語トラブルまたは言語摩擦として現れるインポライトネスは、世界のグローバル化の進展と共に、今後より一層、異文化理解として取り組んでいかなければならない。

---

<sup>1</sup> インポライトネスの日本語訳は、失礼または無礼などに、韓国語訳は、「무례」または「불손」などに訳されるが、本稿では、インポライトネスという用語を用いることにする。

日本と韓国の異文化理解の一例として、例えば、年長者に対する権威を重視する韓国では初対面の人同士がお互いの年齢を確認する言語行動がごく自然なコミュニケーションの一つとして見なされる場合が多い。なぜなら、相手の年齢を確認することが待遇表現の選択の尺度として作用するからである。しかし、日本社会では、むしろ相手への無作法として働きかねない。すなわち、言語トラブルまたは言語摩擦の解消のカギとなるのが、お互いの言語文化に基づいた異文化理解である。

しかし、ここで重要なことは、どういう言語行動がポライトネス及びインポライトネスとして見做されるかということは、お互いの言語文化における社会的・文化的価値体系<sup>2</sup>とは何かと共に、どのような言語行動が相互作用におけるフェイス侵害行為として作用し得るかという観点を総合的に考慮しなければならないという点である。そこで、本稿では社会的・文化的価値体系と言語的側面におけるフェイス侵害行為、これら二つの側面を統合したインポライトネスの教授法を試みていく。

以下、2節は、言語行動におけるポライトネス及びインポライトネスとは、何かについて概観する。3節は、先行研究として韓国語教育におけるインポライトネスのアプローチについて論じる。4節は、韓国の社会的・文化的価値体系について、5節では、社会的・文化的価値体系と言語的側面におけるフェイス侵害行為、これら二つの側面を統合したインポライトネスの教授法を試みる。

## 2. ポライトネス及びインポライトネスの捉え方

これまでのポライトネスに対するアプローチの特徴を Fraser (1990) や Thomas (1995)、宇佐美 (2001) を参考にして分類すると、(I) 言語形式による規範的捉え方と (II) 語用論的捉え方に分類することができる。(I) は主に言語形式とその丁寧度の順序づけを行おうとするアプローチであり、敬語形式と敬語表現の丁寧度との関連する研究 (荻野 1980、井出ら 1986、岡本 1988 など) である。一方、(II) には、会話の原則としての捉え方 (Lakoff 1973、Leech 1983 など) やフェイス保持

---

<sup>2</sup> 서경혜 (2013 : 35) は、価値体系は、地域社会・種族・国民など、特定の集団が持っている文化の基を成す基本因子として、その文化に独自のな構造や様式を付与し、文化を一つの全体として統合させるといふ。このことは、各々の文化を理解するためには人間の思考と行動に意味を付与すると共に方向を付与する価値体系を明らかにしなければならないということを示唆する。

に関わる戦略としての捉え方 (Brown & Levinson 1987)、会話の契約としての捉え方 (Fraser 1990)、談話レベルのポライトネスの捉え方 (宇佐美 2001) などがある。

その中でも特に、Brown & Levinson (1987) におけるポライトネスのアプローチは、Culpeper (1996) や Culpeper, Bousfield & Wichmann (2003)、Bousfield (2008) などのインポライトネス理論にも援用されるほど、絶大な影響力を持っている。Brown & Levinson は、社会の成員は皆、ネガティブ・フェイス (他者に邪魔されたくないという欲求) とポジティブ・フェイス (他者に受け入れられたい、よく思われたいという欲求) を有するとし、二つのフェイスに配慮することがポライトネスであり、二つのフェイスを脅かす行為がフェイス侵害行為であるとする。

一方、Culpeper, Bousfield & Wichmann (2003 : 1546) は、フェイスを侵害することを目的とした戦略として、対立と不調和を引き起こす言語行動をインポライトネスとして捉える。また、Bousfield (2008 : 72) は、ポライトネスの反対概念として意図的に対立を引き起こす言語的フェイス侵害行為をインポライトネスとする。いずれも Brown & Levinson のフェイス概念を援用し、相手のフェイスを脅かす言語行動をインポライトネスとして捉えている。

上記のインポライトネスの捉え方に対して、河 (2014) は、Brown & Levinson におけるフェイス侵害行為とは、合理的な行為者が様々な言語戦略を用いてフェイス侵害行為を引き起こす可能性のあるフェイス損傷を和らげるために設けられた、いわゆる補償行為としてのフェイス侵害行為であり、その根源的な目的は互いのフェイス保持にある。しかし、インポライトネスにおけるフェイス侵害行為とは、談話参加者間における利益の衝突に起因し、行為者のフェイス保持ではなく、相手側のフェイスを侵害する行為に焦点が置かれる。つまり、ポライトネスとインポライトネスにおけるフェイス侵害行為とはその焦点が異なると指摘している。

そこで、河 (2014) は、ポライトネスは相互作用における合理的な利益獲得の言語行動である一方、インポライトネスは利益獲得の衝突として現れる言語行動として捉え、フェイス概念を自己と他者とのあり方や人間の存在の本来の特徴における生物学的観点から「相互行為における互いの行為者が打ち出した社会的価値としてのフェイス」に捉え直している。そして、発話行為における意味特徴や悪態の語彙、蔑視語、差別語などの分析から「不利益表明」「自己顕示表明」「否定的評価表明」

をフェイス侵害行為のプロトタイプとして導き出し、それぞれの下位拡張を以下の通りに分析している。

- ・不利益表明：「命令する」「脅迫する」「攻撃する」「欺く」
- ・自己顕示表明：「侮辱する」「主張する」「自慢する」
- ・否定的評価表明：「疑う」「指摘する」「反対する」「拒否する」「怒る」

本稿では、河（2014）に倣ってインポライトネスを捉え、言語的側面におけるインポライトネスの分析を試みる。

### 3. 韓国語教育におけるインポライトネス

近年、韓国では、정금미（2011）によるポライトネス及びインポライトネスに関する語用論的研究や김태나（2012）による韓国語の発話におけるインポライトネス、이성범（2015）による話者の攻撃的な発話に対する聴者の反応という研究などが行われている<sup>3</sup>。

しかし、韓国教育では、いまだにポライトネスに反する周辺的な言語行動として取り上げられるのが一般的である。例えば、이해영（2003）や윤은미（2004）などによる韓国語母語話者と韓国語学習者における断り表現の言語ストラテジーの分析や李（2006）による日本語母語話者と韓国語母語話者を対象とした不満表明ストラテジーの分析、오경숙（2011）による具体的な断り表現に関する教授法などの研究がある。ところが、こうした研究は発話行為における個別の言語ストラテジーの分析や教授法に焦点が置かれているため、インポライトネスを体系的に捉えているとは言い難い。

一方、김태나（2012、2014：31）は、「무례/불손은 한국의 언중들이 사회적 기준으로 합의한 계관적이고 중립적인 예（禮） 혹은 의（義）에서 어긋나는 언동」とし、インポライトネスの教授法を対人関係における垂直的關係を中心に非言語的（文化的）側面と言語的側面に分けて提示している。非言語的側面とし

<sup>3</sup> 日本では、フェイス侵害行為としてのインポライトネスの考察（河 2014、2016）や過剰敬語がもたらすインポライトネスの語用論的効果に関する研究（河・山中 2012、河 2013、2015）などが行われつつある。

て、集団の結束・調和を重視する集団主義と垂直的序列を重視する権威主義におけるインポライトネス・ストラテジーを提示し、また、言語的側面として、敬語、語彙及び文型の意味機能がもたらすインポライトネスの語用論的効果を提示している。取り分け、インポライトネスを回避する教授法として、対人関係の認識及び判断（特に年長者）、様々なインポライトネスをもたらす語用論的効果の認識及び判断、談話参加者間における利益の方向の認識及び判断、そして仲間意識の拒否及び自己強調などといった社会的・文化的価値に基づいたインポライトネスを取り上げている。

しかし、김태나 (2012, 2014) は、インポライトネスを社会的言語規範に逸脱する言語行動として捉えているため、言語的側面としてのフェイス侵害行為とは何か、すなわちどのような発話行為がフェイス侵害行為として作用し得るかという観点からの教授法が十分、考慮されていないと言えよう。

#### 4. 価値体系におけるインポライトネス

최준식 (2000 : 34) は、韓国の社会におけるインポライトネスの根底には儒教思想、すなわち三綱五倫における「父子有親」と「長幼有序」と関連した家父長的集団主義と序列を重視する権威主義、これら二つの軸を中心に構成されているという。また、서경혜 (2013) は、集団主義及び権威主義の価値体系による韓国文化の特徴を詳細に論じている。それをまとめると、以下の通りとなる<sup>4</sup>。

①集団主義に現れる社会的・文化的価値体系：個人より家族及び集団を重視する。

・ウリ意識を重視する<sup>5</sup>。

プライベートに関する質問が多い<sup>6</sup>。濃厚な人間関係を重視する。

<sup>4</sup> しかし、나은영・차유리 (2010) は、近年、伝統的な集団主義から個人主義へ、権威主義から平等主義への変化が進み、二つの対立する価値体系が混在しているという。

<sup>5</sup> 서경혜 (2013 : 115) は、我が国 (우리나라) をはじめ、我が家、我が校、我が社など、自分と結びついた集団との関係を重視し、その集団の一員としての仲間意識や固い絆などを示す。一方、他人 (남) に対しては、無関心な態度を取るという。

<sup>6</sup> 韓国の人々は初対面の人に対してプライベートな質問、すなわち年齢や家族、学校、住居地などといった質問が多い。このような言語行動は、相手との共感を探し、それに基づいた敬語法の選択を導き出すためである。つまり、独立した個人としての存在の把握より集団の一員とし

- ・個人の個性より他人との調和を重視する。  
自分を立てず、人を立てる。間接的もしくは婉曲的な表現を好む。
- ・遠慮を美德として捉える。

②権威主義に現れる社会的・文化的価値体系：横の関係より縦の関係が優先される。

- ・社会的地位を重視する。
- ・年長者に対する権威を重視する。  
年長者には視線を合わせない。口を挟んではいけない。
- ・私的な関係より公的な関係を重視する。

集団主義における価値体系の特徴は、個人より集団を重視し、個人の個性より集団との調和が求められるため、個人（話し手）を目立たせる言語行動はインポライトネスにつながりやすい。ゆえに、自己顕示表明に関するフェイス侵害行為のうち、「主張する」と「自慢する」表現として、「제 생각은 이렇게 해야 한다고 생각합니다」や「제가 좀 하는 편이죠」などといった言語行動に注意を促す必要がある。

なお、遠慮や謙遜を重視する価値体系の理解として、「변변치 않은 것입니다만」や「아직 멀었습니다」などといった表現の具体的な状況を取り上げなければならない。さらに、ウリ意識として現れる初対面におけるプライベートな質問や他人への無関心、そして濃厚な人間関係として現れるアポなしの訪問や突然の連絡などといった言語行動にも異文化理解が求められる。

一方、権威主義における価値体系の特徴は、横の関係より縦の関係、すなわち垂直的序列を重視し、取り分け年長者に対する尊重がカギとなる。一般的に同一の発話におけるフェイス侵害行為の度合いは、力関係の差が大きければ大きいほど、上位者から下位者へのフェイス侵害行為は緩和され、インポライトネスの度合いが低く見積られる一方、下位者から上位者へのフェイス侵害行為の度合いは高く認識されやすい<sup>7</sup>。

特に、権威主義における韓国の価値体系では、下位者から上位者への指示や命令

---

での個人の位置を把握するための言語ストラテジーである（서경혜 2013 : 116）。

<sup>7</sup> こうした力関係の上位者の持つ権威が受け手の拒否感を減少することを Watts（2003 : 260）は「相互行為における許可されたフェイス侵害行為」という。

などはフェイス侵害行為として認識されやすく、上位者から下位者への忠告や干渉などは、上位者の貴重な知恵として当然、受け入れなければならない言語行動として見做されやすい。ゆえに、不利益表明における「命令する」「依頼する」言語行動や否定的評価表明における「指摘する」「反対する」「拒否する」言語行動に対する異文化理解が求められる。

また、김태나 (2014 : 39) は、年長者との会話における注意点として、年長者の話を遮ったり、口をはさんだりしないこと、また年長者に視線を合わせるより少し視線を下げて話すほうが良いということを指摘している。

以上、韓国社会は、集団主義における集団との調和と権威主義における社会的上位者（年配者、地位など）への尊重が社会的・文化的価値体系の根底であり、こうした価値体系への理解がインポライトネスの解消につながる。

## 5. インポライトネスの教授法

河 (2017 : 395-398) は、言語的側面におけるインポライトネスについて、①語彙②文法・句型③敬語④談話レベルに分けて提示し、取り分け学習者には言語的側面としてのフェイス侵害行為とは何かという点を明確に提示すべきであるという。そこで、本節では、河 (2017) に倣って教授法を模索していく。

### 5.1 語彙に関する教授法

インポライトネスと関連する語彙とは、どのようなものがあるかを調べるため、ドウミ (도우미, 한글능력검정협회, 2006) を参考にした。

#### ・語彙

나쁘다 (5級)、제법 (4級)、당신 (3級)、바보 (準2級)、명신 (2級)、속셈 (1級：制限事項なしとされている) など

フェイス侵害行為に関わる多くの語彙は、「나쁘다」「재미없다」「더럽다」「바보」などのように、相手に対する否定的評価表明に関わる類が多い。関 (1990 : 158)

は、話者があることがらについて評価を定め、述べることを評価述定という（例えば、「彼は頭が悪い」「この映画はつまらない」など）。しかし、こうした語彙は特定の文脈がない限り、おおた学習者の母語の場合でも同様に、相手のフェイスを脅かす語彙として働くと思われる<sup>8</sup>。

しかし、語彙の中には肯定的評価を有しているものの、その使用法に注意が必要な語彙がある。例えば、標準國語大辭典（표준국어대사전）によれば、「제법」という語は、「수준이나 솜씨가 어느 정도에 이르렀음을 나타내는 말」である。しかし、김태나（2014：42-43）は、こうした辞典的意味を「운전하신 지 얼마 안 되셨는데 제법 잘하시네요」のように、そのまま目上の人に用いてしまうと、目上の人の面子と能力を認めない含みが生まれ、さらに「그 일은 제가 제법 잘합니다」のように、話し手自身の評価に用いた場合も自己顕示表明として相手のフェイスを脅かしてしまうという。

同様に、程度や頻度を表す副詞、「조금（쭈）」「도대체」「한번도」「언제나」などや強調を表す助詞「도」「만」「밖에」「만큼」などの使い方にも注意が求められる。こうした副詞や助詞も、一般的に肯定的な使い方が多いが、否定的評価表明を表す発話と共に用いられるとフェイス侵害行為の度合いを高める語用論的効果が生み出される（例えば、目上の人に「일본어 좀 하시네요」という発話や「도대체 뭐가 맘에 안 드는데요」「한번도 도와 준 적이 없잖아요」「언제나 그런 식이에요」「아직도 먹고 있어요?」「너만 바쁘니?」「그것밖에 못했어요?」「다른 사람만큼 일하세요」など）。

さらに、上記の副詞や助詞などを音声的に強調すると、フェイス侵害行為の度合いが高まるため、音声的側面からも運用知識を取り上げなければならない。つまり、語彙の教授法では、言語行動の判断や感情としての否定的評価を表す語彙より社会的・文化的価値体系と関連した語彙に重点を置き、意味機能はもとより、音声的側面も含め、対人関係に関わる運用知識に注意を促すべきである。

---

<sup>8</sup> 近頃、大学における韓国語の授業では、日本語母語話者だけでなく、留学生も多く見られるようになってきている。今後、日本語母語話者だけでなく、留学生も考慮した教授法がさらに求められるであろう。

## 5.2 文法・文型に関する教授法

ドウミ (도우미, 한글능력검정협회, 2006) におけるフェイス侵害行為に関わる文法・文型は以下の通りである。

- ・5級 : 「ポライトネス : 丁寧体、尊敬語」
- ・4級 : 때문에
- ・3級 : 는 건 안되다, ㄹ 리(가) 없다, 아서는 안 되다, 지 않으면 안 되다, 만(도) 못하다, 예 지나지 않다 「ポライトネス : 아 주면 안 돼요, 아 주면 좋겠다/ 좋겠는데(요), 아 주었으면 해(요), 왔으면 좋겠다, 왔으면 하다」
- ・準2級 : 마저, 조차 (助詞), (이)라고는, ㄹ 지라도, 자 - 자 하니, 기는 커녕, 기만 하다, ㄴ 법이 없다, ㄴ 체하다, ㄴ 탓, 나 마나, 는 바람에, 듣지 말든지(간에), ㄹ 바에(야)는, ㄹ 테면, 러면 멀었다, 만 같아도, 먼 몰라도, 먼 못 쓰다, 아 보나 마나, 왔어도, 예 불과하다 「ポライトネス : 왔으면 고맙겠다, 왔으면 싶다」
- ・2級 : 거늘, 거라, 건만, 게, 게나, ㄴ 들, 나, 답시고, ㄹ 라치면, ㄹ 망정, ㄹ 지언정, 았자, 고도 남다, 기 짝이 없다, 기(가) 일쑤이다, 는 고사하고, ㄹ 턱이 없다, ㄹ 래야 ㄹ 수 없다

文法・文型の教授法では、次の3点を総合的に考慮しながら提示していく。1つ目は、どのような文法・文型がフェイス侵害行為として作用するか、すなわち言語的側面における「不利益表明」「自己顕示表明」「否定的評価表明」を明確に提示する。フェイス侵害行為として作用し得る発話行為を明確に提示することは、学習者の理解を深めると同時に、より適切な運用能力へ導き出すことが期待される。

2つ目は、フェイス侵害行為に関わる文法・文型の意味機能にとどまらず、それらの意味機能が持つフェイス侵害行為を緩和させる文法・文型を共に紹介する。例えば、相手の行動を禁じる「아서는 안 됩니다」を教える場合は、「죄송합니다만, 그걸 헤서는 안 됩니다」の文と共に「죄송합니다만, 그것을 하지 않았으면 합니다/그것은 어려운 듯 합니다/그것은 어려운 것 같습니다」な

どといった文法・文型を取り上げ、体系的かつ具体的な言語ストラテジーの運用能力を理解させる。

3つ目は、価値体系におけるフェイス侵害行為という観点から文法・文型の意味機能がもたらす語用論的效果を提示する。例えば、社会的力関係の下位者から上位者への依頼や指示などは、「이렇게 하세요」もしくは「이렇게 부탁드립니다」という表現より「이렇게 하시겠어요」もしくは「이렇게 부탁드립니다」のほうが適切な表現として見做される。すなわち、「-겠-」の文法・文型の意味機能が持つポライトネスの語用論的效果を権威主義の価値体系に照らし合わせて理解させる。同様に、話者の意志を表す「제가 할게요」や「제가 하겠습니다」という表現を取り上げる場合は、「부족하지만, 제가 할게요」「잘은 못하지만 제가 하겠습니다」のように、話者の謙遜を表す「지만」と共に示すことで、集団主義の価値体系における語用論的效果を理解させる。

以上、文法・文型では、価値体系及び言語的側面におけるフェイス侵害行為という観点から価値体系に基づいた文法・文型を提示すると共に、フェイス侵害行為を緩和するための表現として、ポライトネスに関する文法・文型をも一緒に提示し、学習者の運用能力を高めていく教授法の工夫が求められる。

### 5.3 敬語に関する教授法

大半の初級教科書では、対者敬語（丁寧体）と主体敬語（尊敬語）を取り上げているものの、敬語法の運用能力に焦点が置かれているというより、個別の文法項目としての扱いが一般的であると言えよう。しかし、敬語法の本質は、対人関係を考慮した使い方にある。ゆえに、対人関係や場面に応じた待遇表現全般を体系的かつ段階的に提示し、習得させなければならない。

一般的に現代韓国語の敬語は、主体敬語、客体敬語、対者敬語に分類される。

- ・主体敬語：話者が文章に現れる行為や存在、状態などの主体を高める。尊敬補助語幹「-시- (-si-)」を付けて表す。
- ・客体敬語：述語の客体、すなわち文章の目的語や副詞語が指示する対象を高める。드리다 (差し上げる)、모시다 (お連れする)、여쭙다 (お伺いする)、뵙다

(お目にかかる)などの語彙レベルである。

- ・対者敬語：話者が聴者を高めたり低めたりする。

	格式体	非格式体
尊待	上称 (합쇼체)	略待丁寧形 (해요체)
	中称 (하오체)	
非尊待	等称 (하개체)	略待普通形 (해체)
	下称 (해라체)	

初級では、それぞれの敬語の特徴と共に、適切な敬語法とは何かについて、明確な理解が求められる。河 (2015) によれば、日本語の敬語はウチ／ソトという視点の捉え方が鍵となるが、韓国語の敬語は社会的力関係が視点の鍵となる。その上、聴者が最も上位者の場合であれば、他の人物を高めてはいけないという上位者聴者制約 (圧尊法とも呼ばれる) が適用される。

- (1) a. \*할아버지, 아버지 오셨어요? (話者：孫)  
 b. 할아버지, 아버지 왔어요? (話者：孫)  
 c. 할아버지, 저희 학교 선생님이 오셨어요? (話者：孫)  
 d. 할아버지, 저희 학교 선생님이 왔어요? (話者：孫)

(1) は話者が聴者に話題の人物が来たかを質問する発話である。(1) の a と b は、「話者 (孫) < 話題の人物 (お父さん) < 聴者 (お祖父さん)」という社会的力関係<sup>9</sup>であり、聴者が最も上位者である。ゆえに、上位者聴者制約によって、話題の人物の行為を高める尊敬補助語幹「-시-」が付いている a は非文となる。一方、b は話題の人物を高めずに聴者を高める対者敬語の略待丁寧形のみが用いられてい

<sup>9</sup> 敬語法に影響を与える要因について、이익집 (1994 : 233) は、親族の序列、職場 (社会的)、年齢、親疎の順であり、そのうち親族の序列が最も優先的であるという。また、박지순 (2014) は、映画のシナリオを通じて、対者敬語に影響を及ぼす要因を分析し、話者が相手に格式体か非格式体を用いるかは、場面に対する配慮、すなわち改まった場面であるか否かが重要な要因として働く。そして、話者の年齢、聴者の年齢、地位の差、お互いの年齢の差、親疎関係、ジャンル、話者の性別などの順に対者敬語の選択に影響を与えるという。つまり、社会的力関係にその視点が置かれる敬語法である。

るため、適切な敬語使用となる。すなわち、聴者が最も上位者であるため、例え話題の人物が話者のお父さんであっても高めてはいけない。ただし、聴者と話題の人物が同位であれば、cのように「主体敬語+対者敬語」を用いることもあり、また、先生の年齢によってはdのように「対者敬語」のみが用いられることも考えられ、日本語と同様に話者の視点の捉え方に流動性が高い。しかし、성기철 (1991 : 10) によれば、近年、上位者聴者制約は若い世代のほど、緩和されつつあるが、学習者には規範文法として適切な敬語法の指導が必要である。

その上、中上級では、尊敬補助語幹「-시-」の過剰使用として現れる過剰敬語についての教授が求められる。

- (2) a. 생일선물이 고민이시세요?  
b. 즐겁고 행복한 새해 되시세요.  
c. 고객님의 잡채는 테이크아웃이 안 되시구요.  
d. 주문폭주로 배송시일이 소요되는 상품이시세요.

(2) における「-시-」の尊待の対象は文章の主語もしくは主体ではない。aは誕生日のプレゼントを高めるために、「-시-」が用いられているとは考えにくい。いわゆる、尊待の対象が現れていないが、聴者である先生/お客様を想定すると、結局、聴者を高めるために「-시-」が用いられていると見做せる。同様にbも尊待の対象は新年ではなく聴者であり、さらにcとdにおける「-시-」は、あまりにも聴者を意識した結果、用いられた不自然な過剰使用である (이정복 2010 : 223)。つまり、目の前に存在する上位者を最も尊待しなければならない上位者聴者制約がさらに、状況的に目の前に存在する聴者への配慮として拡大解釈・適用された結果、現れる過剰敬語である (河 2015 : 221)。

こうした適切な敬語使用から逸脱した過剰敬語は、時には話者の品格の強調として、時には相手への優越感として現れ、相手を不愉快にさせてしまう (河・山中 2012、2013 など)<sup>10</sup>。ゆえに、インポライトネスの教授項目として適切な敬語法から逸脱する過剰敬語が生み出す語用論的效果に注意を促すべきである。

<sup>10</sup> 過剰敬語に関する詳細は、이정복 (2010) や이수연 (2012)、河・山中 (2012)、河 (2013、2015) などを参照されたい。

- (3) a. 선생님께서도 가세요?  
 b. 선생님도 가세요?  
 c. 어느것이 좋으세요?  
 d. 덱까지는 머세요?

また、初級では日本語の敬語体系と異なる点として、助詞の敬語形と形容詞の主体敬語を取り上げて理解させる。例えば、助詞の敬語形として (3) の a と b のように主体と述語との呼応関係に用いられる適切な助詞の使い分けや形容詞の敬語法として c と d のように、尊敬補助語幹「-시-」を用いた形容詞の敬語法に注意を促す。

そして、呼称に関する「당신」「그쪽」「-씨」「-님」などの使い分けと運用知識の教授法が求められる。2人称代名詞である「당신」という語は、日本語と同じく現代韓国語では、その使い方が非常に限られている。例えば、相手のことをよく覚えていない時に「죄송합니다만, 당신은 누구시죠?」というより、「당신」を省いた「죄송합니다만, 누구시죠?」のほうがより自然でポライトな印象を与える。また、親しい間柄において「니가 해야지」というより、「당신이 해야지」のほうがよそよそしさや冷たさを感じさせる<sup>11</sup>。同様に「내일 그쪽도 오세요?」や社会的力関係の上位者に対して「김씨, 어디 가세요?」「김과장, 내일은 회의가 있으니까 일찍오세요」という呼び方はインポライトネスにつながるため、敬語法の一環として取り上げて理解させる。

以上、敬語の教授法では、適切な敬語の使用法とは何かを明確に提示し、敬語使用・不使用だけでなく、くだけた言い方を含む、対人関係や場面に応じた待遇表現全般を体系的かつ段階的に取り上げていく。その上、中上級レベルでは適切な敬語

<sup>11</sup> 親しい間柄における急な敬語使用、すなわち話し手の視点より距離を遠くに置く敬語使用は意図的に主観的な「ウチ」の関係から客観的な「ソト」の関係へ切り替えることで、相手に冷たさやよそよそしさを感じさせる。古来、神や天皇のような尊貴者の実名を敬避して諱(いみな)を用いる習俗があり(穂積 1919 : 85-86)、そのことは敬語の起源について敬称の接尾語や代名詞がタブーに基づく避称から発していると解いた金田一(1959 : 25-27)の指摘と相通じる。つまり、畏怖するというのは直接言及するのを避け、その対象との距離を保つことであり、敬語とは「敬意」と「敬避」の念を併せ持つのである。この敬語の二つの性質は現代日本語の敬語の中で生き残って、社会の平等化・民主化から「敬避」の意味合いが親しくない人に対して距離を保つ「敬遠」という働きとしてその性質を変え、話し手の視点より距離を遠くに置く敬語使用が相手への「敬遠」として作用し、聞き手を不愉快にさせると考えられる(河 2013 : 247)。

使用から逸脱した過少敬語及び過剰敬語がもたらす語用論的效果を提示し、敬語の運用能力に焦点を置いた教授法を実践していくべきである。

#### 5.4 談話に関する教授法

河 (2017 : 397) によれば、談話レベルでは、ロールプレイとしての教室活動を通じ、フェイス侵害行為の軽減という観点から発話行為が持つ段階的かつ具体的なコミュニケーション上の働きとその語用論的效果を提示し、対人関係や状況、場所などに応じた効果的なコミュニケーション能力の育成が求められる。そのためには、まず、談話レベルにおけるポライトネス及びインポライトネスの度合いの違い、例えば(4)の a~g の段階的かつ具体的な表現の度合いを理解させなければならない。

- (4) a. 창문을 닫아 주시면 감사하겠습니다.
- b. 창문을 닫아 주시겠습니다.
- c. 창문을 닫아 주실래요.
- d. 창문을 닫아 줘요.
- e. 창문을 닫아 줄래.
- f. 창문을 닫을래.
- g. 창문을 닫아.

そして、フェイス侵害行為の緩和としての前置き表現、例えば、謝罪に関わる「죄송합니다만」や謙遜に関わる「잘하지는 못하지만」、理解に関わる「이야기는 잘 알겠습니다만」、話題の切り出しに関わる「실례지만」などを取り上げる。

その上、フェイス侵害行為の軽減という観点から自己顕示表明における「主張する」「自慢する」や不利益表明における「命令する」「依頼する」、否定的評価表明における「指摘する」「反対する」「拒否する」言語行動をロールプレイのタスクとして取り上げ、フェイス侵害行為の軽減を行うための段階的かつ具体的なストラテジーを習得させ、学習者の効果的なコミュニケーション能力を身に付けさせる。

図1. 許可を得やすい内容だと話し手が思っている場合

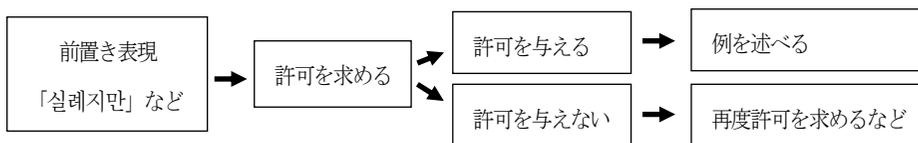
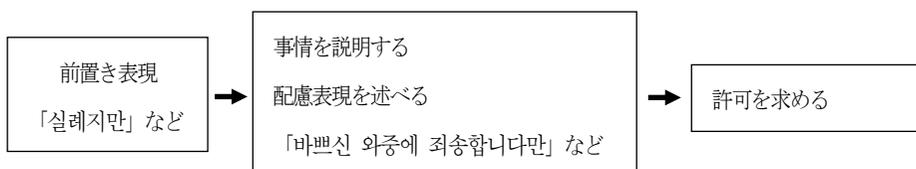


図2. 許可を得るのが難しい内容だと話し手が思っている場合  
またはあまり親しくない人や目上の人に許可を求める場合



ただし、ロールプレイの際には、正しい表現が用いられているかということだけでなく、適切な話の進め方ができていたかどうかについてもクラスで話し合う時間を設け（楢本・宮谷 2004 : 4）、効果的なコミュニケーションの遂行に焦点を置くべきである。例えば、「許可を求める」言語行動を取り上げる場合は、図1、2のように<sup>12</sup>、対人関係や許可の内容を考慮した上で、「許可を求める」一連の談話展開に沿った「許可を与える」言語行動や「許可を与えない」言語行動、「条件付きで許可を与える」言語行動などの言語ストラテジーを総合的に提示し練習する。

一般的にポライトネス及びインポライトネスに関する言語教育は、中上級で扱う項目として思われがちである。しかし、筆者は初級レベルから社会的・文化的価値体系と言語的側面を統合した教授法が有効と考えている。なぜなら、社会的・文化的価値体系に基づいた言語知識は、学習者の理解を深めると同時に、より適切な運用能力へ導くと思うからである。ゆえに、社会的・文化的価値体系に基づいた語彙や文法・句型などを初級レベルから積極的に提示していくべきである。

また、授業では、言語的側面として「言語行動におけるポライトネス及びインポライトネスとは何か」と共に、異文化理解として「社会的・文化的価値体系におけるポライトネス及びインポライトネスはどのように違うか」というテーマを取り上

<sup>12</sup> 図1、2は、楢本・宮谷（2004 : 28-29）を参考に作成したものである。

げ、言語的側面だけでなく、言語文化におけるポライトネスやインポライトネスの理解を深めていく必要がある<sup>13</sup>。

## 6. おわりに

本稿では社会的・文化的価値体系と言語的側面におけるフェイス侵害行為、これら二つの側面を統合したインポライトネスの教授法を試みた。韓国の伝統的な社会的・文化的価値体系では、集団主義と権威主義に支持されてきた。個人の個性より集団との調和が求められる集団主義では、個人を目立たせる「主張する」「自慢する」言語行動がインポライトネスにつながりやすい。また、垂直的序列を重視する権威主義では、社会的力関係の上位者（年配者、地位など）への尊重がインポライトネスのカギとなる。ゆえに、上位者への不利益表明における「命令する」「依頼する」言語行動や否定的評価表明における「指摘する」「反対する」「拒否する」言語行動に対する異文化理解が必要である。

また、言語的側面におけるインポライトネスの教授項目として、①語彙②文法・文型③敬語④談話レベルに分けて論じた。語彙の教授法では、言語行動の判断や感情としての否定的評価を表す語彙より社会的・文化的価値体系と関連した語彙に重点を置き、意味機能はもとより、音声的側面も含めて対人関係に関わる運用知識が求められる。

文法・文型では、価値体系及び言語的側面におけるフェイス侵害行為という観点から価値体系に基づいた文法・文型を提示すると共に、フェイス侵害行為を緩和するための表現として、ポライトネスに関する文法・文型をも一緒に提示し、学習者の運用能力を高めていくべきである。

敬語の教授法では、適切な敬語の使用法とは何かを明確に提示し、敬語使用・不使用だけでなく、くだけた言い方を含む、対人関係や場面に応じた待遇表現全般を体系的かつ段階的に取り上げていく。その上、中上級レベルでは適切な敬語使用から逸脱した過少敬語及び過剰敬語がもたらす語用論的效果を提示し、敬語の運用能

---

<sup>13</sup> 例えば、謝る、褒める、断る、不満を言うなどの言語コミュニケーションやアイコンタクト、ジェスチャー、身体接触、時間感覚などの非言語コミュニケーションの違いを話し合う。また、インタビュー調査やディスカッション、ディベート、自文化紹介などを取り入れ、異文化の多様性と相対性を認識させる。

力に注意を促す。

談話の教授法では、ロールプレイとしての教室活動を通じ、「依頼する」「誘う」「断る」「不満を言う」などといったタスクを取り上げ、フェイス侵害行為の軽減という観点から発話行為が持つ段階的かつ具体的なコミュニケーション上の働きとその語用論的効果を提示し、対人関係や状況、場所などに応じた効果的なコミュニケーション能力の育成を身に着けさせる。取り分け、ロールプレイの際には、正しい表現が用いられているかということだけでなく、適切な話の進め方ができているかどうかについても注意が求められる。

異文化理解では、言語や文化の多様性と相対性を認識し、多元的かつ相対的な物の見方が求められる。ゆえに、授業では、「言語行動におけるポライトネス及びインポライトネスとは何か」と共に、「社会的・文化的価値体系におけるポライトネス及びインポライトネスはどのように違うか」というテーマを取り上げ、言語的側面だけでなく、言語文化におけるポライトネス及びインポライトネスの理解を深めていかなければならない。

本稿では、社会的・文化的価値体系と言語的側面におけるインポライトネスの教授法を試みた。しかし、現段階におけるインポライトネスの研究は非常に数少ない。今後、多角的視点からインポライトネスの研究を行い、研究成果を授業へ反映していかなければならない。さらに、授業を通して教授法の問題点を修正し、それらを取り入れた教材開発をも取り組むべきであろう。

## 参考文献

- 김태나(2012), 한국어 발화에서의 무례 연구, 한국어외국어대학교대학원 국어국문학과 박사학위논문
- 김태나(2014), 무례/불손의 회피 방법을 활용한 교수 방안 - 수직적 관계를 중심으로 -, 언어와 문화 10-2 : 29-58.
- 나은영·차유리(2010), 한국인의 가치관 변화 추이 - 1979 년, 1998 년 및 2010 년의 조사 결과 비교 -, 한국심리학회지 사회 및 성격 24-4 : 63-92.
- 박지순(2014), 한국어 상대높임법 실현의 영향 요인 연구, 새국어교육 98 : 289-324.
- 서경혜(2013), 한국문화교육을 위한 한국인의 가치체계 연구 - 드라마를 중심으로 -, 한국외국어대학교대학원 국어국문학과 박사학위논문
- 성기철 (1991), 국어 敬語法의 일반적 특징, 새국어생활 1-3 : 2-22.
- 오경숙(2011), 한국어어절 화행 교육의 방안 - 중급 단계 학습자를 대상으로 -, 서강인문논총

- 30 : 179-206.
- 윤은미(2014), 한국인과 한국어 학습자의 거절화행에 나타난 공손전략 비교연구 - 체면보호를 위한 언어적 장치를 중심으로 -, *외국어로서의 한국어교육* 29 : 117-145.
- 이성범(2015), 언어적 무례함에 대한 실험화용적 연구 - 공격성 발화를 중심으로 -, *서강대학교출판부*
- 이수연(2012), 서비스업 종사자들의 언어 사용 양상 - 백화점 점원의 언어 사용을 중심으로 -, *어문연구* 71 : 79-96.
- 이익섭(1994), *사회언어학*, 민음사
- 이정복 (2010), 상황 주제 높임 ‘-시-’의 확산과 배경, *언어과학연구* 55 : 217-246.
- 이혜영(2003), 일본인 한국어 고급 학습자의 거절 화행 실현 양상 연구, *한국어교육* 14-2 : 295-323.
- 정금미(2011), 대화에서의 공손과 불손전략에 대한 화용론적 연구, *충남대학교대학원 영어영문학과 박사논문*
- 최준식(2000), 한국인에게 문화가 없다고?, *사계절*
- 李善姬 (2006), 「日韓の「不満表明」に関する一考察 —日本人学生と韓国人学生の比較を通して—」 『社会言語科学』 8-2 : 53-64.
- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子 (1986), 『日本人とアメリカ人の敬語行動—大学生の場合—』 南雲堂
- 宇佐美まゆみ (2001), 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想」 『第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書』 国立国語研究所 (編)、凡人社 : 9-58.
- 岡本真一郎 (1988), 「依頼表現の使い分けの決定因」 『愛知学院大学文学部紀要』 18 : 7-14.
- 荻野綱男 (1980), 「敬語における丁寧さの数量化—札幌における敬語調査から (2) —」 『国語学』 120 : 13-24.
- 金田一京助 (1959), 『日本の敬語』 角川親書
- 梶本総子・宮谷敦美 (2004), 『聞いて覚える話し方日本語生中継—中〜上級編教師用マニュアル』 くろしお出版
- 関正昭 (1990), 『外国人に教える日本語の文法』 一光社
- 河正一 (2013), 「関連性理論から見た敬語の過剰使用とその語用論的効果—慫慂無礼を中心に—」 『日語日文学研究』 87-1 : 233-257.
- 河正一 (2014), 「インポライトネスにおけるフェイス侵害行為の考察」 『地域政策研究』 17-1 : 93-116.
- 河正一 (2015), 「敬語の過剰使用に関する日韓対照研究」 『韓国語教育研究』 5 : 210-228.
- 河正一 (2016), 「インポライトネスの認知プロセス—オフ・レコード・インポライトネス・ストラテジーを中心に—」 『埼玉大学日本語教育センター紀要』 10 : 3-16.
- 河正一 (2017), 「インポライトネスの教授法に関する一考察—日本語教材における教師用指導書の分析を通して—」 河正一・島田雅晴・金井勇人・仁科弘之 (編) 『言語をめぐる x 章—言語を考える, 言語を教える, 言語で考える—, 仁科弘之教授退職記念論文集』 埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書 : 388-400.
- 河正一・山中信彦 (2012), 「質問紙調査に基づく「慫慂無礼」の意味論と語用論—原型とポライトネスの観点から—」 『計量国語学』 28-4 : 125-152.
- ハン글능력檢定協會 (2006), 『「ハン글」檢定公式ガイド合格トウミ初・中級編/上級編』 ハン글능력檢定協會
- 穂積陳重 (1919), 「諱に関する疑」 『帝国学士院第一部論文集』 邦文第二号, 帝国学士院
- Bousfield, D. (2008) *Impoliteness in Interaction*, Amsterdam, John Benjamins.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Culpeper, J. (1996) Towards an anatomy of impoliteness. *Journal of Pragmatics* 25: 349-367.
- Culpeper, J., Bousfield, D., and Wichmann, A. (2003) Impoliteness revisited: with special reference to dynamic and prosodic aspects. *Journal of Pragmatics* 35:1545-1579.

- Fraser, B. (1990) Perspectives on politeness. *Journal of Pragmatics* 14: 219-236.
- Lakoff, R. (1973) The logic of politeness: or minding your p's and q's. *Chicago Linguistic Society* 9: 292-305.
- Leech, G. N. (1987) *Principle of Pragmatics*, London: Longman.
- Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*, London; New York: Longman.
- Watts, R. J. (2003) *Politeness: Key Topics in Sociolinguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.

(埼玉大学非常勤講師)

hajeongil007@gmail.com

## 韓国語教育研究 第7号

ISSN 2186-2044

2017年 9月 10日 印刷

2017年 9月 15日 発行

発行 日本韓国語教育学会  
〒577-8052 大阪府東大阪市小若江 3-4-1  
近畿大学 国際学部 酒匂康裕 研究室気付  
e-mail: jaklemejiro@gmail.com

編集 韓国語教育研究編集委員会  
(委員長 /金世徳 kim@ashiya-u.ac.jp)

印刷 株式会社 仙台共同印刷  
〒983-0035 宮城県仙台市宮城野区  
日の出町二丁目 4-2  
TEL 022 (236) 7161 (代) / FAX 022 (236) 7163